

<研究ノート>

特別活動の目的原理と方法原理に関する実践的考察

—「望ましい集団活動」を通じた実践をもとにして—

常磐大学非常勤講師

伊 東 健

常磐大学人間科学部

森 山 賢 一

Practical consideration about a purpose principle and the method principle of extracurricular activities

—Based on practice through the "desirable group" activity and—

Takeshi Ito

Kenichi Moriyama

キーワード：学習指導要領，生きる力，体験活動，集団活動

概要

本研究は、特別活動の目標、特質、内容といった目的原理、方法原理にかかわって、活動展開をもとに実践的考察を行ったものである。ここでは立志式、生徒の自主性を伸長し選択幅を広げた宿泊学習、生徒会の活性化をはかったクリーン部隊の活躍の3つの実践を取り上げ紹介し、それぞれの実践について考察し、さらに課題についても明確にした。

1. はじめに

教育課程審議会答申(1998年)の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について」に基づき、教育要領、学習指導要領の告示が行われ、小、中学校においては2002年度より実施されている。

このたびの学習指導要領改訂は、教育基本法(第2条)ならびに学校教育法(第21条)の理念が反映され、「生きる力」という理念の共有、基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力や判断力、表現力などの育成、「確かな学力」を確立するために必要な授業時数の確保、学習意欲の向上や学習習慣の確立、豊かな心や健やかな体の育成のための指導の充実などの考えに基づいて行われている。

教育課程部会における審議のまとめのなかで「教育内容に関する主な改善事項」として示された6つの柱は、今後の学校教育において非常に重要な課題として受け止めなければならない。特に「体験活動の充実」への改善事項については、特別活動との関わりも密接であることから、特別活動の目的原理、方法原理といった特別活動の指導に関する問題についてもこれまでの教育の実際から検証しておくことが求められている。

本小論においては、特別活動の2～3の実践事例をもとに、特別活動の目的原理、方法原理について実践的考察を行い、さらに「望ましい集団活動」の在り方について吟味したい。

2. 特別活動の基礎的・基本的な性格

現行の中学校の特別活動の目標は学習指導要領に次のように掲げられている。

「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」

特別活動の領域は、学級活動、生徒会（児童会）活動、クラブ活動（中学・高校はなし）、学校行事の4つの内容がある。

特別活動の基礎・基本的な性格を、安沢純一郎は自主的、実践的な「望ましい集団活動を通して」達成できるという指導原理が働いているとしている。さらにこのことを踏まえて、安沢は「望ましい集団活動能力」育成の現代的意義として「価値観の多様化」と「情報化」をあげている。¹⁾

価値観の多様化や個性重視は、遠心力として作用し、求心力の育成がないと、ともすると自分勝手な行動をとったり、わがままな言動が横行し、集団の秩序を乱したり、不調和をもたらしかねない。従って「望ましい集団活動を通して」の活動として、体験的活動や勤労生産・奉仕的活動の行事を推奨したり、明確に位置づけることが重要となってくる。

ここでは、①ボランティア精神を生かした立志式②生徒の自立性を伸長し、選択の幅を広げる宿泊学習③生徒会の活性化をはかったクリーン部隊の活躍を3つの実践をもとにして考察、吟味を進めたい。

3. [実践1] ボランティア精神を生かした立志式

(1) 勤労体験学習の意義

勤労体験学習の意義としては、人間としてよりよく生き、人のため、社会のために勤め励むという意味をもっており、現代の教育においては、ますます大きな使命を果たさなければならない。

勤労体験学習は、「ア、働くことにより、仕事を成し遂げた喜びや生きがいを得られる（自己実現性）イ、働くことにより、自分のためと同時に社会に貢献できる（社会連帯性）ウ、働くことにより、社会に奉仕できる（奉仕性）」などの多くの利点を上げることができる。

学習指導要領によると、勤労体験学習、特別活動の学校行事の分野にあり、「(5)勤労生産・奉仕的行事」にあたる。

中学校指導書・特別活動編によると、「今日の生徒の生活の実態や社会の要請からみても、正しい勤労観や社会奉仕の精神及び職業観を育成することが重要な課題となっている」そこで、勤労生産や奉仕にかかわる体験的学習として、「例えば、校内において、全校美化日や愛校の日というような名称で、生徒が中心となって学校の清掃や美化のための活動を実施したり、学校の内外での勤労や社会奉仕の体験を行ったり・・・」と、具体的な実践例を示している。²⁾

(2) 活動の概要

茨城県結城市立結城中学校では、例年中だるみになりがちな2年生への対応として、立志式を実施していた。

昔の武士の社会では、15歳になると元服の式を上げ、大人の仲間入りへの自覚をもたせるようにと、立春の頃に立志式を行っていた歴史がある。

これまで当校では、立志式に講師を招いて講演会を行っていたが、生徒はただ受け身で話を聞く形式なので筆者自身も物足らなさを感じていた。そしてそのことを数人の教員にも相談を行った。

2学期の半ば頃、2学年主任のT教諭から、「今年の立志式は、奉仕活動として市の緑道公園の清掃を実

施したいが、どうであろうか」との話があった。筆者はそれは日頃勤労体験学習の必要性を実感しているので、よい考えであり、積極的に実施するように勧めた。

T学年主任は、空き時間を利用して下見に出かけた。そこで市役所の緑道公園担当の職員に偶然出会いその話をしたところ非常に喜んでくれて、清掃したゴミを入れる黒いビニールの袋を学校に寄与してくれることまで話をまとめて帰校した。

この事を生徒自身の問題とするために、学年生徒会で話し合い、さらに各学級でも話し合い、更に学年生徒会で計画立案を行った。期日は12月7日とし、名称も「ウォークリーン」(ウォークとクリーンを合成)作戦と名付けられた。

当日の放課後、2年生348名がそれぞれ幕、草刈り機、ビニール袋を手にし、約2時間一斉に清掃の奉仕活動を行った。

ゴミが散乱していた緑道公園は、たちまちきれいになり、集められたゴミや空き缶は市役所のトラックで焼却処理場へ運ばれて行った。

(3) 実践の考察と課題

立志式の行事として、市の緑道公園の清掃を行った生徒の感想文を見ると、「はじめはおっくうであったが、作業をやっていくうちに、きれいになっていくことが、はっきりわかり、やってよかった」(自己実現性)という意見が多かった。

また他の生徒は、「自分が清掃することによって、これからは自分からゴミを捨てたり、汚さないようにしましょう」という自覚(社会連帯性)が生まれた。さらにある生徒は、市の教育委員会からほめられてうれしかった。機会があったらまたこの様な活動をしたい」(奉仕性)という積極的な考え方をする生徒も出てくるようになった。

これが契機となり、その後、2学年の生徒会が中心となり、結城市の西部の国道50号と国道4号線バイパス立体交差点の両側に、サルビアの花を咲かそうという運動に発展し、3年生になった初夏、340名の生徒が汗を流し、約3500本のサルビアの苗を植えた。やがて、夏から秋にかけて真っ赤なサルビアの花が国道沿いに咲き、道行くドライバーの目を楽しませてくれた。

このように「特別活動」における基礎・基本を、学習指導要領の趣旨をふまえ、「望ましい活動能力の指導」とし、「集団の一員としての自覚を深め、協力してよりよい生活を築こう」(小学校)、「集団の一員としてよりよい生活を築こう」(中学校)を目標として実践したのである。³⁾

4. [実践2] 生徒の自主性を伸長し、選択の幅を広げた宿泊学習

(1) 宿泊学習の意義

中学校指導書・特別活動編によると、宿泊学習は「旅行・集団宿泊的行事」にあたり、学校行事の一つである。学校行事は、学校が計画し実施するものであるが、同指導書によると、「行事の特質や、生徒の実態に応じて、可能な限りの生徒の自主的な活動を助長することが大切である」と述べられている。

中学校指導書・特別活動編によると、宿泊学習〔旅行・集団宿泊学習的行事〕は、「集団行動を通して自立心を養い、自主的に集団の規律や秩序を守る態度を育成するとともに、自然や文化などに親しむ体験を積むための実際的な機会として重要である。その上、教師生徒や生徒同士の相互関係の人的な触れ合いの場

になり、また日常生活と異なる生活環境の中における生徒の内面を理解するための機会としても価値が高い」と述べている。⁴⁾

(2) 活動の概要

茨城県結城市立結城東中学校は、例年2泊3日の宿泊学習を実施しているが、その年は茨城県北浦湖畔にある県立白浜少年自然の家に宿泊する予定になっていた。

当時、2年生の学年主任より、「生徒の自主性を高めたいので、今年はバスで往復するのではなく、片道は切符を自分で買わせ電車で行き、帰りは疲れているのでバスにしたいがどうでしょうか」との相談があった。

私は、「2年生は、まとまりのあるよい学年であり、生徒の実態からみても特に問題はないし、生徒の自主性を伸ばす上でも賛成である。ただ、初めてのケースなので、学年で下見を十分すること、更に、保護者にもよく理解を図るように」と指示した。

2学年部会では、早速下見をした結果、JR水戸線で結城駅より水戸駅へ、そこで鹿島臨海鉄道に乗換え延方駅へ、ここで下車して北浦湖畔の道を約15km歩いて白浜少年自然の家へ行くコースが最適で、15kmを徒歩で行くのは中学生としては、けして無理でないとのことであった。

その後何回か学年部会や学年PTA委員会を開催し、細かいプランを検討した。それによると、約15km歩くのでグループ単位で行動すること、荷物は延方駅で待機するマイクロバスに積み、各人はお弁当と水筒位の軽装で行くこと、雨の時は延方駅からマイクロバスを利用すること、途中二ヶ所のチェックポイントには、本校職員が待機していることなどが決まった。そして現地到着の最終時刻は午後3時までとし、出発時刻はグループの自由にまかせることにした。いよいよ当日になった。快晴であった。私は見送りに結城駅にいった。そこには、すでに2年関係の先生方がおり、早いグループでは午前6時30分に出発したとのことであった。7時30分になると、数グループが集まり、それぞれ切符を手に改札口を通りホームに入った。

ある男子のグループは、まだ友達が1人来てないので、駅からその生徒の家に電話をしていた。家の人の話では、少し前に家を出たとのことなので、その生徒の来る方向を今度はグループ全員で見ている。

間もなくその生徒の姿が見えると、「早く来いよ」「待っていたぞ」など口々に呼んでいた。数分後電車がホームに入り、「行ってきます」と元気よく手を振りながら出かけていった。

従来のように先生方の点呼もなく、各班ごとに責任を持って行動させることによって、仲間意識も芽生え、自主性が育つことを目のあたりにした。

その日の午後電話があり受話器をとると、県東の教育事務所の所長からとのことであった。

電話の話では、所長が水戸駅から鹿島臨海鉄道で出勤途中、中学生のグループに乗り合わせたそうである。電車での様子を見てみると、きちんとしており、話しかけると礼儀正しいし、態度もハキハキしていたので感心し、どこの中学生かと訪ねると、御校の生徒とのこと、早速電話したとのことであった。

思いがけないお褒めの電話で恐縮するとともに嬉しかった。更に所長はこれから白浜少年自然の家にも同様に電話しておくとのことであった。

帰校後の話だと、やはり白浜少年自然の家の所長さんから電話があったことと、宿泊態度が良かったと褒められたとのことであった。

また、こんな話も伝えられた。途中、北浦湖畔の15kmの道を歩くことは、中学生としてはさして困難ではないはずであった。しかし、小柄で約100kg近い体重があり、行動も機敏ではないS君にとっては、こ

の道のりは決して容易ではなかったようである。

同じグループになった他の4人の男子生徒は、なるべく途中で休みをとったり、合唱をしたり、S君の荷物を交替で持ってやったりして、励ましながら午後3時少し前に無事白浜少年自然の家にゴールインしたそうである。

その時は、殆どのグループがすでに到着していた。いくつかのS君を追い抜いたグループは、S君の到着を心待ちし、やがてS君の姿が見えた時、出迎えに出て「間に合ってよかった。ばんざーい！」と言ってくれたので、S君やS君のグループのメンバーは、疲れもとんで行った様子だったと後で引率の先生が報告してくれた。

生徒を信頼し、選択の幅を広げ、生徒の自主性を尊重することにより、すばらしい宿泊学習ができたことを誇らしく思うと共に、これらの企画が、今後の宿泊学習の方向性を示すものと確信したのである。

更に、この学年が翌年3年生になり、関西方面の修学旅行にもこの経験が役立ったのである。

行動はグループ単体とし、集合場所を東京駅の新幹線の改札口にしたのである。なかには数グループが、事前の休日に東京駅まで下見に出かけたようであった。

各学級でも学級活動の時間に、奈良や京都の見学場所を調べ、いくつかのモデルコースをグループで選択させた。

学年としては、資料の準備や事前指導が大変であったが、結果としては上々であった。

私も奈良の万葉植物園のコースを数人の先生方と見回った時、本校の数グループに出会い、あいさつがきちんとでき、楽しそうに見学をしている様子を見て、生徒達も自分で選んだコースを生き生きと見学しており、引率者としても、「こんな引率の楽な修学旅行は初めてだね」と数年前の荒れた当時を思い出して、しみじみと話し合った。

従来、旅行業者が計画を立て、そのひいたレールの上を見学したのでは、印象も薄いし、単なる物見遊山に終わることにもなりかねなかった。

しかし、この様に生徒達が事前に見学コースをよく調べ、グループ単位でそのコースを選択し、責任と自主性をもって見学や行動をするこの様な修学旅行のスタイルが近年、多くの学校に見られるようになったことは嬉しいことである。

(3) 実践の考察と課題

従来一般的に見られた宿泊学習や修学旅行の形態は、教師や旅行業者の立てたプランに従い、数台のバスを連ね、教師にせかされながら、ひかれたレールの上の日程をこなしていくような傾向が強かった。

そこには、児童生徒が何を見学するかという希望も組み込まれず、上からの与えられた旅行であったように思われる。

従って、児童生徒は事前の研究もせず、なかにはその場所に案内されてただ受け身で見学するために、感激や印象も薄く、お金をかけた割合に効果がみられず、教師も修学旅行の成果を学校教育全体に拡大しようという意欲が余り見られなかった。しかし、前述の白浜少年自然の家や翌年の関西方面の修学旅行は、明らかに従来の旅行とは異質なものであった。以下考察と課題とを述べてみる。

a) あえて各自片道の切符を買わせ、更に小グループで行かせたことは、適度の緊張感をもたせ、相互の助け合いが深まり、グループ内での責任感が育つことを期待したが、思った通りの成果が得られた。

b) 学年主任が、新しい試みに挑戦しようとした時、経営者は、従来行ってきた慣行に固執せず、児童生徒の実態や安全性、経費の負担、教育的効果等を十分検討し、ポイントを押さえた指導をして実現させ、しかも成功させたことは、学年主任を育て学年経営に自信を持たせる励みになった。

c) 学校行事等の新しい試みには、やはり保護者の理解と協力が不可欠である。

このケースでは、PTA 学年委員会を開催し、よく説明をしたり、更に各家庭にも説明のプリントを配布し、十分時間をかけて理解を図ったため、無理や混乱もなく、成功裡に終わることが出来た。

d) 2年の時の新しい発想が成果をあげたので、3年生になってから、更に発展させ、自分たちの希望する見学地を小グループでまわり、深い満足感と充実感を味わうことができたのである。このように生徒の自主性を生かした修学旅行のあり方が現在多くの学校に取り入れられてきている。

e) 生徒達は、自分達の見学したいコースを約半年間かけて調べ、グループ全員の自覚と協力で目標が達成できたことは、自信と誇りを身に付けることが出来たものと思われる。

f) 生徒達も、先生方が自分達を信頼していることを自覚し、その期待に答えるような行動をとり、三ヶ年の中学校生活が立派に巣立っていったのである。

g) 宿泊学習や修学旅行がすべて小グループによる自由見学がよいというのではなく、宇留田敬一が言っているように「学校や生徒の見学地など、さまざまな条件によって、見学の型態が決められるであろう。その場合に、安全の確保を最優先に考えること、生徒の希望を尊重することなど、慎重に検討しなければならぬことは少なくないであろう。そのような現実を考えたうえでなお提唱したいこと」として、次の2点をあげている。

「第一は、修学旅行という大きな行事を、教師と生徒が一体となって取り組む活動—課題的活動を考え、学校の教育課程の中核にすえ、各教科、道徳、特別活動の全領域において生徒が修学旅行に関する問題に取り組み、その解決を図るといような教育活動にしたいということである。第二は、学校行事を子供たちの生命を躍動させる体験としたいということである。特に、子供たちが理想や希望を抱いて、学校行事に参画し、知恵や努力を結集して、困難に打ち勝ち、理想を実現していくという『生命の躍動』の場としたいことである」と述べている。⁵⁾

宇留田の提言は、今日子どもたちの心を触むことなかれ主義や三無主義等をなくす意味からも、今後の修学旅行の望ましいありかたを示唆しており、その視点から十分検討をする必要がある。

h) 「国際化時代への対応」として、結城市でも、三つの中学校より、2年生約20名をシンガポールに派遣し、英語を通じて現地のアンダーソン・セカンダリースクールと交流をしている。

現在予算の関係もあり、2学年の学級数だけという限られた人数を派遣しているが、将来は多くの生徒を参加させて、国際性豊かな生徒を育成する必要がある。

5. [実践3] 生徒会の活性化をはかったクリーン部隊の活躍

(1) 特別活動と生徒会活動

学習指導要領は、生徒会の活動について、次のように示している。

「生徒会活動においては、学校の全生徒をもって組織する生徒会において、学校生活の充実や改善向上を図る活動、生徒の諸活動についての連絡調整に関する活動及び学校行事への協力に関する活動などを行うこと。」⁶⁾

更に、中学校指導書 特別活動編の(2)に、「生徒一人一人が、自らの学校生活を豊かで充実したものとするためにも不可欠の活動であることを自覚して、積極的に活動に参加することにより、学校における共同生活を楽しく充実したものとするを旨とした集団活動である」と述べている。

(2) 活動の概要

結城市立結城中学校では、生徒会の顧問を中心に、生徒会の活性化を図るためにアイデアを生かした実践を心掛けている。

例えば、JRC（青少年赤十字）に加盟し、リーダー訓練をしたり、使用済み切手の収集とその寄贈、一円玉募金など多岐にわたって積極的に取り組んでいるがここでは特に、「クリーン部隊の活躍」を紹介したい。

生徒会が呼び掛け、生徒の任意の加入による「クリーン部隊」が発足した。生徒会副会長が隊長となり、15のたて割り班を編成していた。そして、各班長が集まり会議を開催し、どの班がどこを清掃するかを割り当て、原則的には、部活動のない月曜日の放課後を利用して活動している。

隊員は、隊員証を持ち集合場所に集まり、約1時間清掃活動を行っている。主な清掃箇所は学校の近くの、JR水戸線小田林駅のホームやその周辺、更に結城西小学校付近の道路、旧国道50号線沿い等広範囲な地域におよんでいる。

参加を長期にわたって怠ると、除名を宣告されることもある半面、活動が10日以上になると「クリーン賞」がもらえることになる。

生徒会顧問のA教諭は、「当初は、前向きに活動する生徒を育てようとはじめたが、いまでは組織が安定し、この活動を中心に学校が活気づいている。いつでも入隊可能なためもっと規模を広げ、今後も継続していきたい」と話している。

(3) 実践の考察と課題

現代の子どもたちは、進んで働くことを好まない傾向がみられる。しかし、学校生活においては、児童生徒が働く体験を得る場や機会は数多くある。ただ勤労を好まないからと現状を追認するだけではなく、このように生徒会活動やクラブ活動、それに、ゆとりの時間などを活用し、創意工夫することが大切である。学校での働く体験や機会は、児童生徒が将来社会人として必要な、正しい勤労観や職業観の基礎を育成する上からも重要である。

前記の「クリーン部隊」の参加や編成、作業の分担もすべて生徒達自らが活動の計画を立て、実践している。更に、長期にわたり怠けると除名もあり得ること、また、10回参加すると「クリーン賞」をもらえるなどの工夫がみられる。

指導者としては、生徒が活動しやすい環境を整備したり、必要に応じて適切な援助の手をさしのべることも大切である。

また、各学校の生徒会の顧問が集まり、研修・交流会を開催したり、生徒会のリーダー講習会を行ったり、各校の生徒会の役員が定期的集まり、各学校の実践を発表し合い、参考にしあうことによって、生徒会の活性化、ひいては、特別活動目標の基本を達成することになってくると思われる。

6. おわりに

本報告においては、特別活動の目的原理、方法原理を実際の教育活動のなかでどのように展開していくか、

さらにこの2つの原理は実際の教育活動のなかでどのようなものであるかを検証してみた。

そこでは望ましい集団活動とはどのような活動であるのかが浮き彫りにされ、明確化されたといえよう。望ましい集団の形成は望ましい集団の活動を通して可能となる。

ここで取り上げた望ましい集団活動の展開では、当然、自主性、自立性の伸長が眼目とされなければならない。

今後は、これまでの実践を特別活動全体計画の中で、さらに明確に位置づけ、これまで以上に全教職員が共通認識のもとで推進できるように学校教育目標を踏まえた上で全体計画を策定することが強く求められる。

引用文献

- 1) 安沢純一郎「道徳／特別活動における基礎・基本の指導」『基礎・基本を身につける』
186頁 東洋館出版社 1993年
- 2) 伊東 健「自己教育力を育て、家庭・地域社会との連携を深める生徒指導のあり方」
36頁～ 第一法規懸賞論文佳作 1992年
- 3) 「勤労生産・奉仕的行事」『中学校指導書・特別活動編』84頁 文部省 1992年
- 4) 「旅行・集団宿泊的行事」『中学校指導書・特別活動編』82頁 文部省 1999年
- 5) 『特別活動論』第9章「教育学大全集」32巻 第一法規 1981年
- 6) 「生徒会活動」『中学校指導書・特別活動編』51頁 文部省